まちの史跡めぐり

216

国会図書館所蔵資料の閲覧（12）

町文化財専門委員
石瀧 豊美

国立国会図書館デジタルコレクションで「糟屋郡須恵村」の検索を続けます。

今回もまた思わぬ人物に出会いました。島田繁大佐。日露戦争の戦死者の一人ですが、「須恵町戦没者名簿」にも記載がなく、1983年の『須恵町誌』編さん時点では知られていない人物でした。

最初に大植四郎編『国民過去帳　明治之巻』（尚古房、1935年）の島田繁の項を引用します。西暦は石瀧が加えました。

島田繁　陸軍歩兵大佐、正五位勲三等功三級　福岡県糟屋郡須恵村大字佐谷四××、士族にして、明治十二年（1879年）石塚烈三郎、喜多村辰次等と少尉に任じ、鹿児島営所、歩兵第十四連隊第二大隊小隊長と為り、十四年（1881年）中尉に昇り従七位に、廿年（1887年）頃大尉に任じ、歩兵第十七連隊第三大隊中隊長に補し従六位勲五等に至る。廿八年（1895年、日清戦争）八月廿六日少佐に昇り、同連隊第二大隊長仰付けられ、功四級勲四等に叙し、三十四年（1901年）頃第三師団副官たり。三十六年（1903年）七月十一日歩兵第廿九連隊長に補し、三十七年（1904年、日露戦争）従軍、悪戦居士の異名あり。三十八年（1905年）三月二日高臺嶺附近に戦死す。正五位（特）勲三等功三級に叙し、旭日中綬章を賜ひ、六月三日仙台市に於て、葬送に付、勅使として宮城県知事田辺輝実を差遣、白絹二匹を下賜せらる。（番地は一部を××に置き換えた。以下同。八七三ページ）

あいまいな情報も含まれていますが、まず目に付くのは島田繁は「須恵村大字佐谷」の士族の出というところです。士族とは江戸時代の武士身分のことですが、残念ながら佐谷に島田という士族がなぜ住んでいたのか、詳しい事情が分かりません。幕末から廃藩置県（1871年）にかけて、福岡の城下町に住んでいた武士たちが糟屋郡や早良郡に移住するということがありましたので、その一人かもしれませんが、正確には分かりません。

歩兵第二十九連隊長として日露戦争で戦死し、その葬儀には明治天皇が勅使を差遣し、白絹二匹を下賜しました。昭和期には天皇が勅使（天皇のお使い）を遣わして弔問するのは少将以上に限られますが、島田繁は大佐としてその栄誉を受けました。白絹二匹というのは布地のことですが、霊前に供えられました。天皇からいただいたというところに価値があります。

戦死の翌日（1905年3月3日）の官報に名前が出てきます。以降の官報も含め、以下にまとめてみます。（　）内は官報の号数と発行日です。

島田繁は大佐に昇任した翌日に戦死してしまったわけですが、この辞令が本人に届く前に亡くなった可能性もあります。連隊長は大佐が就きますが、当時は戦死者が相次ぐなどの事情で中佐が連隊長に任命されることもありました。第二十九連隊は仙台市に置かれていました。

・3月1日　陸軍歩兵中佐従五位勲四等功四級島田繁は陸軍歩兵大佐に任ぜられる。（6499号、3月3日）

・3月2日　（戦死）陸軍歩兵大佐従五位勲四等功四級島田繁は功三級に叙し、金鵄勲章を授けられる。また、勲三等に叙し旭日中綬章を授けられる。（6503号、3月8日）

・7月12日　（遺族）宮城県仙台市の島田ヒサヲが、故陸軍歩兵大佐島田繁の明治三十七八年戦役（日露戦争）の功により、金4千円を支給される。（6615号、7月19日）

島田繁葬儀への勅使差遣は官報に記事があります。おそらく連隊葬として葬儀が行われたものと思われます。金鵄勲章は戦死者へ授けられる勲章、旭日中綬章は勲三等という功績に対する勲章です。

○勅使差遣　一昨三日、仙台市ニ於テ、故陸軍歩兵大佐従五位勲三等功三級島田繁葬儀執行ニ付キ、勅使トシテ宮城県知事田辺輝実ヲ差遣サレ、白絹二匹ヲ下賜ヒタリ。（6577号、6月5日）

日露戦争終結の翌年の官報に島田繁の戦死が記載されています。

陸軍軍人ノ死亡者左ノ如シ（陸軍省）

三月二日清国盛京省高臺嶺附近ニ於テ戦死

福岡県糟屋郡須恵村大字佐谷四百××番地

士族

陸軍歩兵大佐　島田繁（島田繁のみを抽出。6802号、1906年3月6日）

この情報が『国民過去帳』に反映したもののようです。なお、島田を福岡市出身とした本もあります。しかし、官報の記載からも島田の本籍が須恵村にあったことは間違いないと思います。

当市出身の（日露戦争の……石瀧）戦死将校としては軍神吉岡友愛大佐を始め、島田繁大佐、本田喜熙中佐、廣瀬直士少佐、吉塚道夫大尉、上村正親中尉、宮崎敬次郎中尉等があり、武烈照々永く護国の武勲を輝かされてゐる。（『福岡市市制施行五十年史』福岡市、1939年、326～7ページ）。

吉岡友愛大佐（福岡市地行出身）も日露戦争奉天会戦で戦死しました（1905年3月7日で、島田大佐の戦死の5日後）。福岡市の西公園に銅像がありましたが、戦争中に供出されました。西公園には勤王家加藤司書、平野国臣、軍神吉岡友愛大佐と三つの銅像がありましたがいずれもなくなり、平野国臣の銅像だけが戦後再建されました。西公園の参道、坂道の途中の左側に入ったところにあります。

島田繁連隊長の指揮系統は次の通りです。黒木為楨の第一軍（近衛師団・第二師団・第十二師団から成る）に属していました。師団の下に旅団が二つ、旅団の下に連隊が二つ所属します。福岡歩兵第二十四連隊も第一軍の所属。朝鮮半島に上陸し、鴨緑江を越えて満洲へと進出しました。

満洲軍総司令官・陸軍大将（元帥）大山巌→第一軍司令官・陸軍大将黒木為楨→第二師団長・陸軍中将西島助義→第三旅団長・陸軍少将松永正敏→歩兵第二十九連隊長・陸軍歩兵中佐島田繁（室井兵衛編著『下郷殉国史』1982年による。下郷は福島県南会津郡下郷町。同書に島田繁の写真がありました）

陸軍少将多門二郎著『弾雨を潜りて』（1927年）から島田繁戦死の部分を引用します。日露戦争の動員令が下ったのが1904年2月4日。多門は仙台第四連隊所属の中尉で陸軍大学校の入学試験準備の勉強中でした。以下は島田が戦死した当日の記事。多門も戦場にいました。

明くれば三月の二日。連隊は師団命令によって、更に第十八、第十九号堡塁に向って攻撃を続行しなければならぬが、前面の敵情は勿論地形も判らず、一切が大なる謎である。斯く偵察時間の余裕も与へられず、只管に攻撃前進を急ぐことは、忌憚なくいへば原則外れだ、無茶だ、しかし一旦命令を受けた以上は躊躇すべきではない。（略）

連隊の占領してゐた高地と旅団司令部との中間地帯は、敵の銃砲弾の標的となって、一兵でもその間に姿を現はすが早いか、射弾の集中を食ひ、ために両者の交通は全く杜絶して、連隊は一時孤立の境地に陥った。連隊はそのままの姿勢で夜に入り、工事を施して敵襲に備へた。

この日歩兵第二十九連隊の向った高台嶺東方高地では、天明と共に盛なる銃砲戦が起り、午後になると、私たちのゐる高地から、稜線の上を側面縦隊で運動する敵の部隊や、所々に我が散兵の姿も見えたが、その攻撃は成功せず、連隊長島田（繁）大佐は戦死せられた。（340～2ページ）

日露戦争は多くの戦死者を出したことで知られていますが、将校が戦死する割合が高かったことも特徴とされています。島田大佐や吉岡大佐の戦死もそれに当たります。

吉岡友愛大佐銅像（石瀧蔵の絵葉書）
※西公園にあったが現存しない

島田繁大佐（『下郷殉国史』より）